

保育士養成課程における施設実習に関する一研究

Reserch about Institutional Practice during a Nursery School Staff Training Course

(2016年3月31日受理)

平尾 太亮 土谷由美子
Taisuke Hirao Yumiko Tsuchiya

Key words : 施設実習, 意識, 比較

I. 問題と目的

近年, 子どもの多様化や, 子どもを取り巻く社会情勢の変化などから, 子どもの支援者である保育士の重要性が以前に増して高まっている。加えて, 保育士の役割は多岐にわたり, 業務は増大している。

保育士の業務として, 児童福祉法総則において, 児童福祉の理念, 児童の育成の責任, 原理の尊重が明示されている。また, 児童福祉施設を利用する児童(満18歳に満たない者, 障害のある児童)に対して, 保育士は「保育士の名称を用いて, 専門的知識及び技術を持って, 児童の保育及び児童の保護者に対する保育に関する指導を行う者」(児童福祉法第18条4)としており, 保育士は児童福祉の基本理念を理解した上で, 児童や保護者が心身ともに健やかに育成する責任をおった専門職であるといえる(小倉ら2009)。しかし, 本学科に入学していった学生の多くは, 保育士を保育所保育の役割としてのみとらえており, 児童福祉施設や社会福祉施設での施設保育の役割を理解している学生は少ない。また, 学生は保育士資格取得のために実習があることは知っているが, 施設で実習することを知らない学生が大半である。

これらの問題については, 小倉ら(2009)が, 社会福祉施設で生活する児童を養護する方法などを学ぶ養護内容や障害児を理解する障害児保育などを事前に学ぶことが, 施設実習の意味を高め, 保育士の職域について深く理解すると述べるように, 入学後に意識づけをしていく必要がある。しかし, 保育士養成機関では, 「事前学

習の内容」「実習時期」「学生の実習に対する姿勢」「過密なカリキュラム」「個々の学生に応じた個別対応」「施設側からの要求」など, 数多くの共通の課題を持ちながら日々の実践や研究がなされており(石山ら2008), その中でさらに意識づけをおこなうことは, 学生にさらなる負担の増大につながりかねない。

実習に関する研究では, 山田(2011)の実践的な学びを深めるための実習事後指導として, 実習個人カルテ作成の取り組みが有効であるとの報告や, 小島(2013)の学生が自ら保育者になるという自覚のもとに, 自分で気付き行動に移すことができるような指導が, 保育者として働くようになった時を見据えての真の指導になるといった提言, 鈴木ら(2013)のねらいを意識することによって充実した実習を展開することができ, その実習での学びが学生の育ちに繋がり, 自らの保育観, 子ども観を形成する基盤となるといった, 現時点での指導にとどまらず, 将来を見通した実習指導のあり方が取り上げられ研究されている。

それらをふまえた上で, 本研究では再度学生の施設実習に対する意識と, 実習前後の施設, 利用児・者を含めた施設実習に対するイメージの変化を調査する。加えて, 藤重(2014)の研究を基に, 実習前の事前学習の必要項目について明らかにし, 今後の施設実習の事前指導に生かしていきたいと考える。

II. 研究方法

1) 対象

中国短期大学保育学科平成27年度1年生と過年度履修生計125名（男性4名，女性121名）を対象とした。

調査時期は，施設実習終了前の平成28年1月と施設実習終了後の平成28年3月の計2回アンケート調査をおこなった。

2) 方法

実習に参加した125名全員を対象に無記名式アンケートを実施し調査・分析をおこなった。

調査内容としては，実習先の施設や利用児・者に対するイメージの調査，実習に向けての学習，実習中の内容，卒業後の進路の大きく4つの内容から調査を行った。実習先の施設や利用児・者に対するイメージについては，非常に良いイメージをもっている，良いイメージをもっている，どちらでもない，悪いイメージをもっている，非常に悪いイメージをもっているの5件法で調査した。実習前の事前学習の必要項目の調査では，藤重（2014）の「実習前の事前学習の必要性について」の15項目を実習担当で協議・検討し，10項目に内容を絞りアンケート項目を作成し，今以上に大学で学ぶ必要性を強く感じる，今以上に大学で学ぶ必要性を感じる，今の大学での学びで十分である，実習中に学ぶ必要がある，の4件法で調査した。

各質問項目には自由記述欄を設け，具体的な内容を記述してもらった。

III. 結果と考察

1) 実習先および希望実習先について

① 実習先について

施設実習先は表1の通りである。入所型障害者支援施設が43.2%と最も多く，ついで児童養護施設の17.6%である。入所型障害者支援施設と通所型障害者支援施設を合わせると，54.4%になり，半数の学生が児童福祉施設ではなく，障害者総合支援法の定める成人施設で実習していることがわかる。

表1 実習先の種別

乳児院	2人	1.6%
児童養護施設	22人	17.6%
児童自立支援施設	3人	2.4%
情緒障害児短期治療施設	3人	2.4%
通所型障害者支援施設	14人	11.2%
入所型障害者支援施設	54人	43.2%
児童発達支援センター	6人	4.8%
福祉型障害児入所施設	15人	12.0%
医療型障害児入所施設	6人	4.8%

② 希望実習先について

希望実習先は表2の通りである。児童養護施設が30.6%と最も多く，ついで児童発達支援センターの22.6%，福祉型障害児入所施設の12.1%と続く。このことから，学生は児童に関わることのできる実習先を希望していることが分かる。

学生の希望調査アンケートからも「赤ちゃんがいる施設に行きたいと思ったから志望した（乳児院希望者）」や「将来，保育所への就職を考えた場合に，特別な配慮が必要な子どもが在園しているため，その子どもに対する支援方法を学びたいと思い志望した（児童発達支援センター希望者）」など，「保育士＝子どもの支援」という考えのもと，施設実習先を希望している学生が多くいることが明らかになった。また，児童養護施設を希望している学生は「心理的に傷ついた子どもの支援をしたい」と言った声が聞かれたが，背景には健常な児童とのかかわりを望んでいることが推察される。

一方で障害者支援施設を希望している学生は「ボランティアに行き，利用者との関わりが楽しかったため，もっと関わってみたいと思ったから志望した」，「将来的に介護福祉士の取得（本学専攻科進学）を考えているため，利用者に関わり，学びを深めていきたいと考えたから志望した」など，本人の実習に至るまでの経験や，将来像を見通した結果から志望していることが明らかになった。

施設数にはかぎりがあるため，今後も学生の実習希望先と実際の実習先にはズレが生じることが考えられる。そのため，土谷ら（2014）でも述べられているように，どのように実際の施設を体験し，実際のイメージを学生が獲得していくかが課題になるであろう。

表2 実習希望先の種別

乳児院	12人	9.7%
児童養護施設	38人	30.6%
児童自立支援施設	6人	4.8%
情緒障害児短期治療施設	4人	3.2%
通所型障害者支援施設	7人	5.6%
入所型障害者支援施設	11人	8.9%
児童発達支援センター	28人	22.6%
福祉型障害児入所施設	15人	12.1%
医療型障害児入所施設	2人	1.6%
未記入	1人	0.8%

2) 施設実習前後でのイメージの変化

① 実習先施設へのイメージ

施設実習前と施設実習後の施設に対するイメージは、どのように変化したのであろうか。施設実習前、施設に対するイメージは、非常に良いイメージをもっているが8.1%、良いイメージをもっているが52.4%、どちらでもないが38.7%、悪いイメージをもっているが0.8%、非常に悪いイメージをもっているが0.0%となっている(表3-1)。

どちらでもないと答えた学生のアンケートからは「実際の施設に行っただけで、イメージがわからない」という内容の記述が多くみられた。講義内で社会福祉施設について学び、実習先が決まったら各自で実習先施設について事前学習をしているが、学生自身としては実際の施設に対するイメージがわきにくく、結果どちらでもないと答える学生が多かったと考えられる。

一方、非常に良いイメージをもっていると良いイメージをもっていると答えている学生のアンケートからは「ボランティアに行ってみて、とてもよい雰囲気だったから」や「電話連絡をした際に、職員の方がとても優しく対応してくださり、良いイメージをもった」、「施設ファイル(本学では過去に同じ施設に行った学生の資料を施設ファイルとして残している)を見て良いイメージをもった」などの内容が記述された。そのため、施設に対する具体的なイメージを持っている学生は、良いイメージを持ちやすいことがわかる。

実習後に同様のアンケートを実施すると、非常に良いイメージをもったが48.0%、良いイメージをもったが

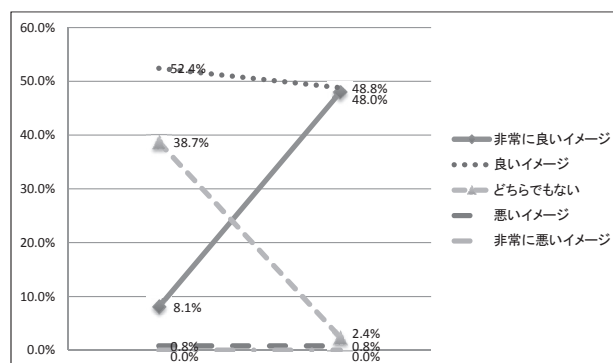
48.8%、どちらでもないが2.4%、悪いイメージをもったが0.8%、非常に悪いイメージをもったが0.0%となった(表3-1, 図1-1)。非常に良いイメージをもったと良いイメージをもったをあわせると96.8%となり、実習を通し、多くの学生が施設に対して良いイメージをもつようになったことがわかる。これには、先にも述べたように、実習前のアンケートでわからないと答えていた学生が実習を通して施設の実際にふれ、具体的な施設のイメージを持つことができるようになり、評価が変化したと考えられる。

一方、職員の利用児・者に対する対応への違和感から、施設実習後に悪いイメージをもつようになった学生もいた。

表3-1 実習前後での施設へのイメージの変化

	実習前		実習後	
非常に良いイメージ	10人	8.1%	60人	48.0%
良いイメージ	65人	52.4%	61人	48.8%
どちらでもない	48人	38.7%	3人	2.4%
悪いイメージ	1人	0.8%	1人	0.8%
非常に悪いイメージ	0人	0.0%	0人	0.0%

図1-1 実習先施設へのイメージ変化



② 利用児・者へのイメージ

施設実習前と施設実習後の利用児・者に対するイメージは、どのように変化したのであろうか。施設実習前、利用児・者に対するイメージは、非常に良いイメージをもっているが2.4%、良いイメージをもっているが28.2%、どちらでもないが66.1%、悪いイメージをもっているが3.2%、非常に悪いイメージをもっているが0.0%となっている(表3-2, 図1-2)。

どちらでもないと答えた学生が一番多くなったが、自由記述には「実際の利用児・者とかかわったことがないため、イメージがわからない」という内容が多くみられた。施設に対するイメージと同様で、講義内で利用児・者についての知識は持っているが、実際のイメージがわきにくく、どちらでもないと回答した学生が多かったと考えられる。

一方、良いイメージと回答した学生は「施設にボランティアにいった時に利用者の方とかかわり、とても楽しかったから」や「身近に障害をもった方がおり、身近な存在だから」などと記述しており、こちらも実習先施設へのイメージと同様に、ボランティア等で利用児・者の具体的なイメージをつかめている学生が、良いイメージを持ちやすいことがわかった。

そのため、施設実習後のアンケートでは、実習を通して利用児・者に対する具体的なイメージをもつことが可能になった結果、非常に良いイメージをもったが46.4%、良いイメージをもったが49.6%であった(表3-2, 図3-2)。非常に良いイメージをもったと良いイメージをもったをあわせると96.0%となり、実習を通し、多くの学生が利用児・者に対して良いイメージをもつようになったことがわかる。自由記述欄にも「利用児・者が優しく、とても暖かい気持ちになった」や「障害ということで自分自身が壁をつくっていたが、利用児・者は自分たちと何ら変わらないと感じ、打ち解けることができた。とても利用児・者が好きになった」などのように、実習を通して利用児・者に自分が受け止められた結果、良いイメージをもつようになった学生や、自分が「利用児・者=〇〇」のように勝手にイメージし壁を作っていたが、それが間違えだったことに気づいた結果、良いイメージをもつようになった学生もいた。

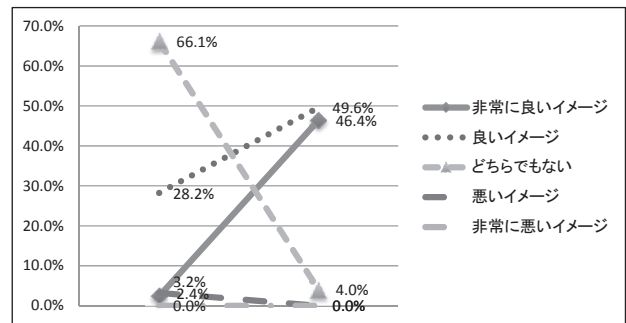
以上の結果から、学生は施設や施設を利用する利用児・者に対して、暗さや怖さといった、ネガティブなイメージをもっていることが推測される。講義内や報道でふれられることは、入所するに至った背景的な要因や利用児・者の不適応行動、それらの対応に苦慮する職員の苦悩や葛藤といった、学生にとって、自分ではできるだろうか？怖い人がたくさんいるんじゃないか？のように不安が増すような情報が多くなりがちである。そのため、実習に対する不安がより増してしまう状況になっているのであ

ろう。利用児・者を支援することは大変なことであり、時には利用児・者との間で衝突が起きることも事実である。しかし、学生達が目にする情報と実際の施設、利用児・者の姿には大きな隔たりがあるため、その点についてどのように補っていくのが養成校としての課題になるだろう。

表3-2 実習前後での利用児・者へのイメージの変化

	実習前		実習後	
	人数	割合	人数	割合
非常に良いイメージ	3人	2.4%	58人	46.4%
良いイメージ	35人	28.2%	62人	49.6%
どちらでもない	82人	66.1%	5人	4.0%
悪いイメージ	4人	3.2%	0人	0.0%
非常に悪いイメージ	0人	0.0%	0人	0.0%

図1-2 利用児・者へのイメージ変化



3) 卒業後の進路

卒業後の希望進路は表4と図2のとおりである。

施設実習前は保育所保育士志望の学生が64.1%と最も多く、ついで幼稚園教諭の20.2%である。合わせると8割を超え、学生は、卒業後に乳・幼児と関わる仕事につきたいと考えていたことが分かる。一方で、児童福祉施設や社会福祉施設といった福祉職を希望する学生は9.7%と少なく、本学専攻科介護福祉専攻に進学し、介護福祉士の取得を目指す学生に至っては1人もいなかった。本学に入学しているということは、将来保育者になることを目指していると考えられるが、学生の中では、保育者=乳・幼児と関わる仕事であり、それを満たす進路を選択した結果、このような結果になったのであろう。

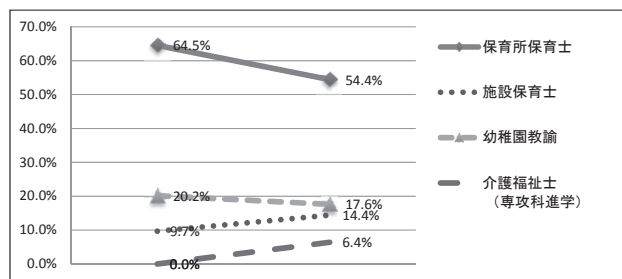
しかし施設実習後に再調査すると、選択に変化がみられる。実習後も保育所保育士や幼稚園教諭になろうと思っている学生が多く、合計では全体の7割以上にのぼ

る。しかし、施設保育士への就職希望が14.4%に増加し、専攻科介護福祉専攻に進学希望をする学生も6.4%に増加している。実習を通して、施設や利用児・者を知る中で、再度卒業後の進路を検討するに至った結果であろう。漠然とした保育職という夢から、具体的に進路を考え始めた結果と述べた土谷ら（2014）の研究と同様の結果になっている。

表4 卒業後の進路

	実習前		実習後	
	人数	割合	人数	割合
保育所保育士	80人	64.5%	68人	54.4%
施設保育士	12人	9.7%	18人	14.4%
幼稚園教諭	25人	20.2%	11人	17.6%
介護福祉士 (専攻科進学)	0人	0.0%	8人	6.4%
小学校教諭 (子ども学科編入)	0人	0.0%	1人	0.8%
一般職	4人	3.2%	3人	2.4%
その他	2人	1.6%	2人	1.6%
未記入	1人	0.8%	3人	2.4%

図2 卒業後の進路



4) 実習に向けての学習

施設実習に望むにあたって、学生は様々な学習をする必要がある。児童福祉や社会福祉、障害といった専門的な知識や実習に関する知識や技術はもちろんのこと、礼儀やマナー、利用児・者の生活を支援する上で必要な日常生活の知識など多岐にわたる。しかし、施設実習の実習先種別は様々であり、求められる知識や技術も種別による違いはもちろんのこと施設差も大きい。そこで、学内での事前学習としてより学びを深める必要のある知識と、事前学習に加え実習を通してさらに深めていく必要がある知識についてアンケートから明らかにした（図3-1）。

アンケートの結果から、本学の学生は10項目全てにおいて、大学で今以上に学ぶ必要があると考えていることが明らかにされた。特に利用児・者に対する観察力・洞察力や利用児・者の発達過程の理解、施設での遊びや活動を実施する際に必要な知識・技術や障害児・者を理解する上で必要な知識についての2項目を、8割以上の学生が今以上に大学で学ぶ必要があると感じていることがわかった。施設実習後に学生から話を聞くと「勉強したつもりではあったが、もっと勉強しておけばよかった」、「わかってはいたつもりだったが、掃除や礼儀といった日常の経験が実習にあれば必要になるとは思っていなかった」などのように、自分の学習不足を感じた発言が多く聞かれた。養成校としても、実習の実際と大学での学習の関連を、学生視点で説明しながら関連付けを再度していく必要があるだろう。

一方で、大学だけでなく実習中に学ぶ必要のあるものとしては、共感的なかわりが12.8%と一番高く、ついで観察力・洞察力の8.0%、保護者対応の7.2%と続いている。どれも実際に直面した状況や相手によって少しずつ変化していかなければならない知識や技術であり、実習中に学ぶ必要があると感じたのであろう。大学での知識は基礎ではあるが、実際の支援となるとケースバイケースで対応しなければいけないものも多くあり、このような結果になったと考えられる。

では、施設ごとに求められる内容に違いはないか図3-2～図3-4で明らかにしたい。図3-2は児童養護施設、図3-3は障害児施設（通所・入所含む）、図3-4は障害者支援施設（通所・入所含む）で学んだ内容について示している。全体の結果と同様に、多くの項目で今以上に大学で学ぶ必要があると過半数以上の学生が感じていることがわかる。児童養護施設では、利用児の発達過程の理解や利用児に対する共感的なかわり方の知識、記録を書く力や障害児を理解する上で必要な知識の2項目について、障害児施設では、利用児に対する共感的なかわり方の知識や利用児に対する観察力・洞察力、利用児の発達過程の理解や障害児を理解する上で必要な知識についての2項目で、9割以上の学生が学ぶ必要があるとした。また、障害者支援施設では、利用児・者の発達過程の理解や障害児・者を理解する上で必要な知識についての1項目で、8割以上の学生が学ぶ必要がある

とした。利用児・者を理解することで、支援を実施することができる。そのため、発達過程の理解や障害の理解について、学習の必要性を感じたのであろう。また、それらの知識をもとに支援をしていく際に、相手の立場に立って考える共感的な関わりはとても重要な意味を持つ。そして、日々利用児の状態が変化する施設において記録は、利用児の様子を共有できる有用な手段の1つである。実習を通し、記録の重要性に再度気づき、学習の必要性を感じたと考えられる。

以上のことより、施設実習における事前指導の重要性と、事前指導でさらに深めていかなければいけない内容が明らかになった。今回の結果からは10項目全てにおいて、学生に対する意味付けの徹底が再度必要であることがわかった。ただ、実習指導だけですべてを賄うことは難しい。藤重 (2014) でも述べられているように、様々な授業や様々な機関が連携し、それぞれの特徴を發揮しながら学生を指導し導いていく必要があるだろう。鈴木ら (2013) のように、将来を見通した指導をしていく中で、実習指導をより良いもの実習に臨むようにしていくとともに、将来の保育者を養成していくことが、養成校としての責務となろう。

図 3-1 実習に向けての学習 (全施設)

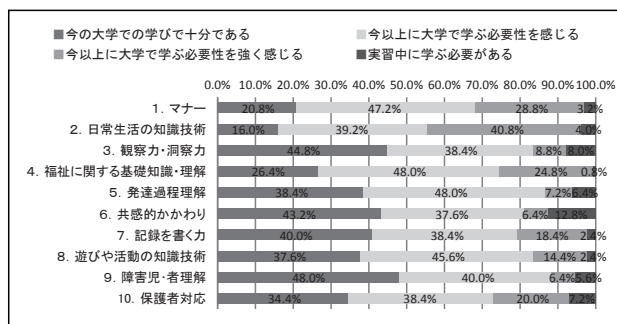


図 3-2 実習に向けての学習 (児童養護施設)

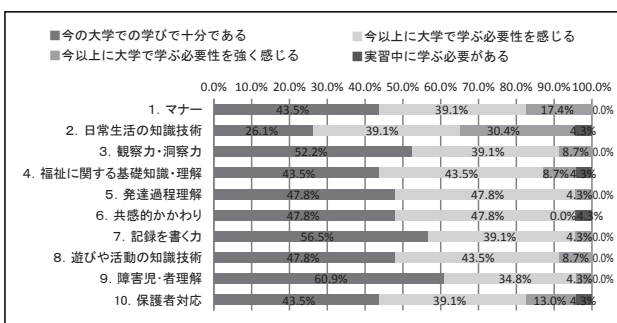


図 3-3 実習に向けての学習 (障害児施設)

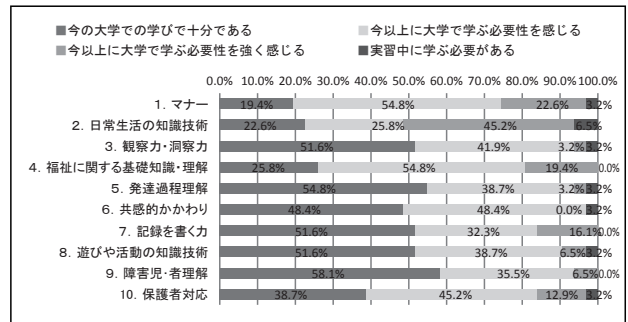
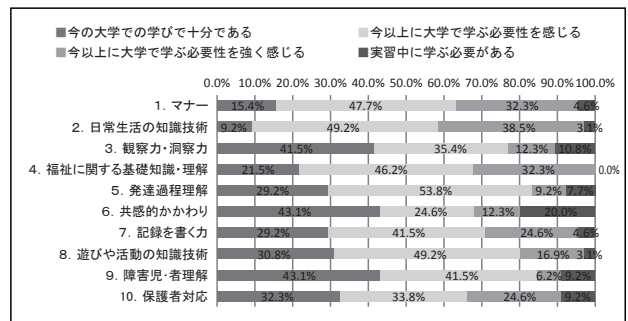


図 3-4 実習に向けての学習 (障害者施設)



V. 参考文献

- ・藤重育子 2014 保育実習における学びと課題 東邦学誌 第43号 pp.161-170
- ・石山貴章・安部孝 2008 保育士養成機関における『施設実習』の現状と課題 (1) 九州ルーテル学院大学紀要visio 第38号 pp.157-170
- ・小島千恵子 2013 実践力を身につけるための実習プログラムの構築 名古屋柳城短期大学研究紀要 第35巻 pp.173-181
- ・小倉毅・土谷由美子 2009 保育士養成課程における施設実習に関する課題 中国学園紀要 第8号 pp.77~87
- ・鈴木方子・大岩みちの 2013 保育者を目指す学生の育ちを願って 岡崎女子短期大学研究紀要 第46号 pp.1-7
- ・土谷由美子・平尾太亮 2014 保育士養成課程における施設実習に関する課題Ⅱ 中国学園紀要 第13号 pp.31~36
- ・山田秀江 2011 実習事後指導に関する一考察 四條畷学園短期大学紀要 第44巻 pp.25-31